中国トロツキストの命運

――人民中国に暮らして――

長堀祐造　編訳

まえがき

昨年（二〇〇〇年）度、訪問専家として滞在した中国で、一九五〇年代に投獄された経験を持つ元中国トロツキー派の二氏にインタビューする機会を得た。ここにその内容を紹介したい。掲載の都合上、インタビュー原稿は編訳者の手で圧縮、再構成した。したがって文責は全面的に編訳者が負うものとする。

両氏によれば、学術的歴史問題としてのトロツキー派問題についてのインタビューは、現下の中国では二人の安全に影響を及ぼすことはなかろうということだが、編訳者としては両氏に迷惑が及ぶのを極力避けるためその氏名は仮名とし、一部地名の使用も控えた。中国トロツキー派問題は歴史事件と化したとはいえ、中国トロツキストは反革命罪で逮捕、投獄されたのであり、人民共和国の法律に基づく確定判決は、いまだ取り消されたわけではなく（反革命罪自体はすでに人民共和国の刑法から消えたのではあるが）、一般に反革命罪の元囚人は、いまだ公安当局の監視から完全に自由というわけではないと思われるからである。こうした事情をまずご理解いただきたい。

にもかかわらず、このインタビュー内容は、これまで中国国内外を通じて公になることのなかった中国大陸に暮らす、元トロツキストの生の声――たとえ完全でないにしても――を伝えるものとして一定の価値をもつであろう。抗日戦勝利から、その後の国共内戦期、さらには解放後に到るトロツキー派としての地下活動体験と逮捕投獄、出獄して労働者となった後の反右派闘争～文革期の処遇、そして改革開放後の公民権の回復、定年退職後の陳独秀研究への挺身など、歴史事件の当事者の証言として興味深いもの

であるばかりでなく、人の生き方の問題としてもいろいろと示唆的である。さらに、従前の中国トロツキー派史の研究書や老トロツキー派の回憶録等では知ることのできない、抗日戦勝利から解放後に到る中国トロツキー派の動きの一端を伺い知る上でも貴重な証言が含まれている。また、人民共和国にあって政治的権利をもっとも奪われてきた層に属する元トロツキストたちの生活実態は、中国革命がうちに孕んでいたスターリン主義的要素――たとえば人権の軽視や政治的複数主義の欠如など――も浮き彫りにするであろう。中国トロツキストの中国革命観もソ連の一国社会主義が破産した今こそ、傾聴に値する部分もあろう。

なお、以後、[ ] 内は訳注。

＊　＊　＊

長堀　まず、お二人が抗日戦後の時期トロツキー派運動に入った経緯をお聞かせください。

梁真　当時、私たちは高校生で、ちょうど解放戦争［一九四六―四九年の国共内戦］の最中でした。十代半ばの青年で、社会意識が芽生え始めてきた頃です。その頃、国民党統治は腐敗していました。私たちの郷里の学生には一つの特長がありました。それは正義感というもので、私たちは国民党統治に反対する行動を展開しました。当時、共産党も私たちの学校で活動していました。そんなわけで、民主思想はかなり強烈で、民主と自由を求めて、私たちは民主運動に参加しました。デモをして、国民党に民主と自由を要求し、同時に内戦に反対しました。その過程で、私たちはトロツキー派の思想に触れました。マルクス主義の経済学、哲学などの本を読み、それからロシア革命史――これはトロツキーの書いた革命史がありましたが――やらフランス大革命やらを討論、研究しました。こうして民主思想から社会主義思想を求めるようになったのです。当時中国共産党の状況については多少知る程度でした。その後、じっくり討論をし、多くの本を読んで、中共内からトロツキー派が生まれたこと、それがソ連に由来することを知りました。私たちの第一の任務は国民党に反対し、また共産党が執行するスターリン主義に反対することでした。私は四七年後半から、五二年までずっと活動しましたが、五〇年に高校を卒業した後は大学受験のため上海にでました。同志たちとの関係はそのまま続いていました。

解放前の主要な活動は国民党に対するものでしたが、解放後はスターリン主義に反対しました。共産党は社会主義をやると言いながら新民主主義を持ち出しましたが、これはブルジョワ階級に配慮して労働者の利益を損ない、さらに共産党がやろうとした党の独裁は、マルクス主義のプロレタリア階級理論に合致しないものと考えたからです。

長堀　梁真さんは高校卒業後、五〇年に上海に行かれた後はどうなさいましたか。

梁真　上海で受験し、合格したのですが生活のため上海で教師を一年して、それからまた受験して別の大学に入りました。その後、陝西省のある大学に移り、

五二年になってトロツキー派問題がおこり、除籍されたのです。

長堀　逮捕前後のことをお聞かせください。

梁真　まず、供述を迫られ、さらに色々な過程を経て、最後に五年の判決がありました。五二年から五七年まで服役しました。五七年頃は、中ソ関係は比較的良好で、刑期の短い五年、七年、十年の者はほぼ全員刑期終了前に仮釈放の形で出獄しました。

長堀　あなたたちの逮捕容疑は反革命罪ですか。

梁真　そうです。最初、当局は罪を認めさせようとしましたが、私は認めませんでした。私は自分は反革命ではないと言いました。思想問題は思想的に解決すべきだと毛主席も言っている、と。あなたたちと闘うために武器をかざしたことはなく、単に理論上意見が違うだけだと言いましたが、彼らは認めず、どうしようもありません。これはトロツキー派という帽子を最初からかぶせたのだと、私は考えました。解放後、上海のトロツキスト多数派は仕事をやりかけのまま、逃げてしまったので、私たちのことはすっかり露見してしまっていました。供述しないわけにはいきませんでした。供述なしでも判決があるわけですから。モスクワ裁判とまったく同じでした。供述しなければ、させようとし、しようとすれば、彼らの言うとおりに供述しなければならないのです。そういう事情ですから、供述せざるを得ませんでした。もう一つの道もありましたが、それは死を意味しました。供述しなくても罪は決定されます、死刑です。あきらめて、早くけりを付けよう、こう考えて、私たちはみな供述しました。すると、すぐにことは片づき、判決が下りました。

沈石　解放後、中共は他の反対党の存在を許さなくなりました。民主党派も存在したのですが、それは中共の団結の対象でしかありませんでした。私たち元トロツキー派の問題の根本はそれ以前にありました。二〇年代末の中国共産党内の分裂はソ連のスターリン派とトロツキー派の分裂に発していました。中共の主要な目的は国民党打倒、国民党反対でした。私たちは国民党に反対する一方、他の党派とは団結してきました。共産党とも団結してきたのです。こういうことがありました。一九四七年六月二日に、反飢餓、反内戦、反迫害の全国的な高まりを見せた学生の一大運動がありました。この運動は上海、北京で起ったのですが、私た

◉梁真

一九三〇年生。一九五〇年高校卒業。中学教員を経て、陝西省の大学に学ぶ。この間、高校時代にトロツキー派運動に参加。一九五二年一二月、中国全土で一斉に展開されたトロツキー派粛清で逮捕、懲役五年の判決を受ける。五七年、刑期をわずかに繰り上げて、仮釈放。郷里に戻り、一時、私立学校の物理教員となる。五八年、工場技術者となるが、五八年反右派運動の余波で再び「反革命」として批判の対象となる。二年間の観察処分を受け、以後、政治的監視を受けるだけでなく、七九年まで昇給なしという経済的圧迫も受ける。七九年、ようやく公民権を回復し、行動上の自由もある程度認められる。五八年以来複数の工場で労働に従事、九〇年、定年退職。

ちの郷里にも波及しました。わが町では主要な学生連合会の主要権力はトロツキー派が握っていました。トロツキー派はこの反飢餓の大デモンストレーションに参加しました。共産党のスローガンは基本的に当地の学生連合会のスローガンと一致していました。わが郷里の学連は全体的にはやはり共産党が主流でしたが、その中にはトロツキー派もおり、最有力部隊だったのです。それで私たちは共産党とも関係がよかったのです。共産党も私たちも地下の存在で、公然たる存在は国民党だけでした。私たちは共産党とも一致して国民党に反対していたのです。私たちは当時、共産党が民主的で、革命的だと認めていました。私たち自身も革命的で、スローガンはかなり非妥協的かつ急進的なものだったでしょう。それでも私たちは共産党と団結していたのです。トロツキー派問題は解放後に生じました。解放後、共産党の主要な目的は一党制の実現になりました。トロツキー派は反革命と断定すべきだとされ、それまでの経緯は問題にされなくなりました。この根本はスターリンがソ連でやったことにあります。しかし、当時学生のトロツキー派地下党員、共産党党員はともに同窓生で、時には話が合いました。こんなわけですから、私たちは共産党に反対したことはなかったのです。もちろん共産党が叫んでいたのは新民主主義でしたが。またもちろん、共産党の中には党派性が強くて、お前らトロツキー派とは連合できないという者もいました。私たちは共産党の勇敢さは認め、また共産党が革命の要求を代表していることは認めていました。同窓生の中には民主党派の者もいて、彼らは共産党と団結していました。私たちの当時の主要な方針は国民党に反対することでしたが、私たちには、銃もなければ、共産党が解放区や農村で持っていたような組織も軍隊もありませんでした。私たちの主力は都市で、都市の主力は学生と一部少数の労働者でした。しかし、当時の社会の雰囲気はまだ開放的で、学校から街頭へ、あらゆるものが社会の世論の上で、成長しようとしていました。私たちの町ではまず学生がこうして運動をしていました。さらに、もっと大きな要因は、国民党政治が非常に腐敗していたということです。庶民は本当に天地を恨んでいました。米すら買えなかったのです。当時、あくどい商人が米を買い占め、値上がりを待ったものですから、市場では米が買えず、物価は騰貴しました。一般庶民は悲鳴を上げ続けました。さらに、商店の同盟休業がありました。これは隊列を組んで、県政府に行き、国民党政府の前でスローガンを叫んだりするのです。これには私たち正義感あふれる学生も支持に出かけました。

長堀　お二人とも同じ町の出身ですか。

沈石　そうです。私たちの郷里は非常におもしろいんですよ。解放前は人口は多くなく、学校も大学はありませんでした。高校はといえば、高校生は社会的に非常に大切にされていました。高校の先生の社会的地位も非常に高かった。ですから、外から情報が入ってくると、まず高校生の間で反応が出ました。学生組織の力は同郷の力でした。一方、好ましくないこ

と、悪いニュースがあると、授業ボイコット、商店の同盟罷業、何でもできました。ですから当地の高校生会は地域社会でかなり先進的な役割を持っていたのです。

長堀　沈石さんは五〇年に北京に来たのですか。

沈石　そうです。私が郷里でトロツキー派だったのは四六年、四七年のころです。四七年六月二日の学生の大運動、反飢餓、反内戦、反迫害運動は知っていますよ。昆明に西南連合大学があり、有名な聞一多教授は国民党の銃弾を恐れず、犠牲となりました[一九四六年七月]。この事件の後、全国の学生運動が盛り上がり、私たちの郷里でも、これに呼応しました。六・二以後、私たちは友人、同窓生と研究会を組織して、読書会と称しました。

長堀　五二年、毛沢東は全国でトロツキストを逮捕しましたが目的は何だったんでしょう。

沈石　毛沢東は一党独裁をやろうとしていたのでトロツキー派を弾圧したのです。しかし、毛沢東のやり方はスターリンとは違いました。スターリンは肉体的消滅を方法とし、党に反対する者はみなトロツキー派と見なしました。中国でも誰それがトロツキー派だとされれば、反革命とされたのです。トロツキー派は一つの罪名となりました。その後この問題は語られなくなりました。語ればトロツキー派ということになるからです。

長堀　日本でもトロツキストとは思想内容の問題ではなく、ある種の記号でした。

梁真　反対意見があれば、反党です。たとえ共産党員でも反対意見があれば反党なんです。反党の名目はトロツキストということです。トロツキー派は共産党に反対なんですから。

沈石　こうした概念は、スターリン主義のものです。他の罪名がなければトロツキストという罪名を着せたので、人々は恐れたのです。

長堀　お二人は逮捕されたわけですが、どうして共産党に露見してしまったのですか。

沈石　解放前、郷里のトロツキー派組織はすでに破壊されていました。解放後まもなく、当地のトロツキー派組織のトップが上海に逃げ、多数派に入り、中央委員になりました。ですから、組織内部のことはよく知っていたのです。彼は持ちこたえられなくなり、共産党員の兄の勧告や家庭の圧力もあり、共産党に通報したのです。彼自身の思想も動揺していました。それで、組織文書などをみな共産党の指導部のところに持っていったのです。もちろん共産党の指導者は寛大な処置をとりました。条件はおわかりのように、すべてのトロツキー派組織の材料を共産党に提供することでした。

◉沈石

一九三〇年生。高校時代の四六年、トロツキー派運動に参加。一九五〇～五二年、北京の大学に学び、北京市トロツキー派組織の指導的立場につく。五二年一二月、逮捕。懲役五年の判決。農村で労働改造、五七年わずかに刑期を残し、仮釈放。郷里で教員となるが、元トロツキー派ということが露見し、職を追われる。以後、梁真と同様、様々な政治上、日常生活上の不利益を被りながら、工場労働者として三一年間働く。七九年以降は公民権を回復し、一定の市民的自由を獲得、八八年、定年退職。

梁真　この男の兄が老共産党員だったというのは客観的な要素で、主観的な要素を言えば、彼自身の思想に問題があったのです。もともと彼ら兄弟とは高校で同窓でした。

長堀　ところで、お二人はいつ頃お知り合いになったのですか。

梁真　五七年に出獄して郷里に戻ってからです。高校も監獄も別々でした。

長堀　監獄は普通の監獄ですか、政治犯の監獄ですか。

梁真　私の獄には政治犯もいましたが、政治犯は一般の刑事犯よりも待遇が少しばかりよかったですね。たとえば、政治犯は寝るにも一人一枚の寝台用の板がもらえましたが、一般の刑事犯は大部屋に雑魚寝でした。食べ物も政治犯はある週は生活改善というのがあり、ちょっとばかりましになりましたが、一般の刑事犯にはそういう機会はありませんでした。

沈石　監獄ごとに条件は違っていました。私の所は総じて言えば、まあまあでした。懲罰、闘争の時は厳しかったですね。それが終わると、労働農場に労働改造に行くのです。

私たちは、いろいろな囚人と一緒でした。隔離されていた者もいました。国民党や、特務、軍人とか多くの囚人がいました。しかし、後期になると、私たちが知識分子で教養水準もかなり高いということと、さらに私たちの「犯罪」の問題性、観点が特殊なこともあって、当局は私たちを集めて学習させました。時には本や、新聞を読ませてくれました。他の囚人たちはそういうことはありませんでした。規則遵守という点は一般囚人と同じです。最初のうちは中国は比較的安定していましたから、監獄でも食べる方面ではつらいこともありましたが、腹一杯食べられはしました。私の出獄後の六〇年ごろには多くの地方で、一般庶民が食べ物にありつけない状況になり、監獄の待遇も悪くなっていきました。

長堀　毎日労働したのですか。

沈石　当初は毎日、供述問題がありました。これに一年あまりかかり、その間は外には出してくれません。私たちには労働のほうが楽でした。労働させてくれないとなると、それは問題が出てきたということで、闘争をやられることになるのです。問題にけりがつくと、また労働に出ていくということになります。

長堀　ではお二人は文章を書かされたわけですね。

沈石　供述書です。この事件では政治関係をはっきり書かなければなりませんでした。

長堀　お二人の裁判には正式の法廷が開かれたのですか。

沈石　当初は軍事法廷です。軍管会というのがありました。軍事管理です。解放後には軍事法廷が組織され、何でも審理しました。まだ今のような法律もなく弁護士もつきませんでした。

長堀　罪名は反革命罪で、刑期は懲役五年。当時は自分たちの罪を知っていたのですか。

沈石　「反革命鎮圧条例」という規定があり、犯罪と刑期を規定していました。当時、問題は私たち自身の思想でした。捨て身でしたから、逮捕されたらどうしようとは考えていませんでした。学生時代

は本当に革命をやっていたのですから、そんなことは考えもしなかったのです。逮捕後、一つ一つ問題に直面したのです。

長堀　五二年の逮捕と五七年の仮釈放は時期的に何らかの必然性があるのでしょうか。

沈石　はっきりしませんが、五二年の逮捕はスターリンの生誕七〇周年の祝賀の動きと関係があるかも知れません。五七年は、スターリンの個人崇拝が批判され、中国でもこの問題が批判され始めた時期で、これと関係があると思います。毛沢東もソ連のこの問題を見ていました。

長堀　五二年に逮捕されたトロツキー派の数はどのくらいだったのでしょう。

梁真　概数はわかりませんが、各地のトロツキー派が捕まりました。

沈石　四百人ぐらいいたといわれてます。

梁真　四百人には留まらないでしょう。わが郷里だけで二百人あまりいたんですから。全国各地で逮捕されたんです。当局はおそらく、逮捕者の中でも刑罰を加えるべき者とそうでない者とを分けたのです。読書会に参加した者は外郭組織の参加者あるいはシンパと見なされました。こういう人には刑罰は与えず、供述を取るだけでした。しかし、団［トロツキー派の大衆組織、例えば後出のSYなど］に参加した者は反革命と見なされました。逮捕の際はそんな区別はお構いなしですが。供述が終わった時点で、本当に読書会だけの参加者なら釈放されたのです。団員は刑を受けました。活動期間が短ければ刑期も短く、活動期間が長くて範囲が広ければ罪は大きいと考えられ刑も重くなりました。

長堀　五七年に釈放されたときには何か条件はありましたか。

梁真　ありません。むこうが自分で決めたことですからね。君らは改造期間中行ないがよかった、悔い改めたことがわかったので帰すことにした、と言ってました。みな仮釈放でした。刑期満了前に釈放されるんです。無期や未決の人は釈放されませんでした。鄭超麟などは未決のまま投獄されていて、このときも釈放されませんでした。私たち刑期が五年の者は実際は四年四ヵ月獄中にいました。

長堀　五七年に郷里に帰ってから仕事の方は問題はなかったのですか。

梁真　どうにもなりませんでした。当局は紹介してくれません。私たちは自分の条件に合わせて自分で仕事を探しました。前科があるわけですから、普通の職場は受け入れてくれません。当然档案資

鄭超麟（一九〇一―一九九八）――――
鄧小平らとフランスで勤工倹学。中国社会主義青年団旅欧支部結成にも参加。帰国後、中共の宣伝工作などに従事。大革命敗北後、陳独秀らとトロツキー派に転じ除名。以後一貫してトロツキズムの立場を堅持。一九五二―七九、中共の獄で政治犯として過ごす。著書に『鄭超麟回憶録』などがある。詳しくは本誌Vol.5所載拙稿参照。

（一九九六年撮影、家族の提供による）

料を見ますから。すると、前科がわかり、たとえ技術があっても技術系の仕事はさせてくれません。たとえば元教員だった人はもう教えることはできません。教育部門が許さないのです。工学をやっていたとすれば、工場にまわされます。私は工学を学んでいたので、機械を扱い、化学工場で働いてきました。

沈石　当時は、何か仕事をやろうにも、地方機関はどこもだめで、労働者になるほかなかったんです。私は郷里に戻った当初は高校で教えていたのですが、一学期が終わったところで、トロツキー派だった前歴がばれて、二学期からはお払い箱となり、仕事がなかなか見つかりませんでした。私たちのような者は知識分子の仕事をしたいと思うものです。その後、大躍進が始まり、多くの労働力が必要とされ、それで私は造船工場に入りました。

長堀　文革の時期はどうだったのでしょうか。

沈石　五二年以後は中国トロツキー派は実際まったく消滅してしまいました。私たちのように思想上、まだ抜けきらない者はいましたが、組織はなくなっていました。みな、あいつは反革命だ、トロツキー派だと知ってはいました。職場の方も私たちは死んだ虎で何もできないということはわかっていました。文革は基本的には党内の実権派を標的にしたもので、彼らの矛先は直接、私たちに向けられたものではありませんでした。しかし、文革の十年間、私たちが安穏と暮らせたというわけではありません。労働者の給料は上がりましたが、私たちはそのままで、仕事は相変わらずでした。しかし、勝手な発言や行動は許されません。私たちは右派よりももっと下の二等公民と位置づけられていましたから。

梁真　造反派や紅衛兵たちは、地主、富農、資本家、右派や歴史上の反革命の人物を引き立て役にしました。走資派の存在は私たちにとっては盾の役割をしてくれました。造反派の主要な矛先は、実権派に向いていましたから、私たちは引き立て役にすぎませんでした。

沈石　文革期には私たちも隔離審査を受けました。刑は加えられることはなく、時には手紙も出せましたし、批判闘争もないときがありました。一年ほどこの審査がありました。しかし、一カ所に集めて行なうのではなく、それぞれの工場で行なわれました。

梁真　各職場ごとに審査が行なわれたのです。私は文革中、他の人より条件はよかったんですが、それは工場の技術を私一人が握っていたからです。私に手を出せば生産に影響が出ました。当時私の工場では文革に必要な製品を作っていました。墨汁、インクなどで、ビラ印刷には欠かせません。生産が停止すれば市内の店は品切れになり、よその土地から入ってくることはありません。よそでも文革をやっているわけですから。当局者も私をどうこうすることはできなかったのです。十数日は、審査がありましたが、聞かれなければ答えず、隔離も名ばかりで、工場が私を必要とするときは帰されました。工場ごとで対応が違ったのです。造反派はその日の都合で来させたり帰させたりしました。しかし、過激なのもいて、

工場の党委はあまりに左だったので、耐えきれず自殺者も出ました。

長堀　退職後、陳独秀研究に励んでいらっしゃるということですが。

梁真　陳独秀研究はかつては不可能でしたが、改革開放以後、解禁されました。研究には目的があります。過去にトロツキー派は反革命だったというなら、またトロツキー派の理論が間違いだったというなら、私たちはトロツキー派理論、社会主義理論が間違いであったかどうかさらに研究したい。陳独秀が漢奸だというなら歴史をはっきりさせなければなりません。それは私自身が自分たちの政治的主張の是非を認識するということです。私に間違いがあったとするならそれはどこにあったのか。そしてその誤りというのは、反革命的な性質だったのかどうかはっきりさせよう、死んでも、潔白を晴らそうというのが目的です。そのほかには何もありません。

陳独秀研究を始めたのは、九三年の頃です。『陳独秀研究動態』〔中国現代文化学会・安慶市陳独秀学術研究会刊の内部発行誌。既刊二六期〔「簡報」三期を含む〕で現在一時停刊中〕を読んだ後、私は編集者に手紙を書き、その後、協力するようになったのです。それまではいい本があれば買って、個人的に読んでいました。一緒に研究や討論するとかはしませんでした。

沈石　以前は陳独秀研究の本は出版できなかったのです。しかし、陳独秀問題はトロツキー派の間ではすでに論争がありました。トロツキー派はたくさん資料を持ってましたから。鄭超麟は陳独秀の秘書をしており、王凡西も親しい友人で片腕でしたから、二人とも陳独秀のことについて色々語っています。ですから、早くからこの問題については知っていました。人が陳独秀のことをどうこう悪口を言っても、私たちの頭に入りませんでした。彼らのいうことは根拠がないんですから。研究し始めてから、私たちは多くの理論を提起しました。今ではソ連のアルヒーフの資料も出てきて、中共の左右のジグザグも、みなソ連のしたことだとわかりました。私たちが言うことは昔は信じてもらえませんでした。私たちがちょっと何か言うと、君たちはトロツキー派だと言うんです。しかし、今では資料が出てきました。社会科学院のメンバーも陳独秀の右翼日和見主義という評価について名誉回復しました。ですから、まだ、時間をかけて検証すべきこともあるのです。

長堀　陳独秀は基本的に完全に名誉回復されたのでしょうか。

梁真　今のところまだです。右翼日和見主義については昨年〔一九九九年〕一二月前に、結論が出て、今後党史を書くに当たっては陳独秀は右翼日和見主義、投降主義だったとはしないということになりました。トロツキー派問題についてはまだ検討されていません。

長堀　中共が完全に陳独秀の名誉を回復するとなると、陳独秀は晩年トロツキー派ではなかったという結論に落ち着くのではないでしょうか。

梁真　今では多くの学者がそういう考えを持ち出しています。陳独秀は南京の監獄を出て以降、トロツキー派とは関係を

断ち、自分はいかなる党派をも代表しないと声明を出した、と。しかし、鄭超麟や王凡西が言うところによれば、陳独秀が武漢時代［一九三七年九月－一九三八年六月］に書いた手紙があり、この手紙から、陳独秀の声明は国民党特務をごまかすためのもので、実際、思想的にはトロツキー派と関係があったことを物語っている、と。陳独秀は武漢で王凡西らを何基灃［当時武漢で療養中だった国民党軍の師団長］の部隊に送りこもうとしました。しかし、この件は露見して、蔣介石は何を異動させました。陳独秀はなぜ王凡西や濮清泉［陳独秀のいとこでトロツキー派の一人、別名濮徳志、一九〇五－］にこういうことをやらせたのでしょうか。やはりトロツキー派と関係はあったのです。重慶にいたとき［一九三八年七月－八月］、何之瑜［別名何資深、一八九八－一九六〇、陳独秀の北京時代の学生で中共幹部を経てトロツキストとなる。解放後、旧友毛沢東の獄で獄死］と関係はずっと良好でした。陳独秀の生活方面の面倒を見るため、北京大学の同窓生たちが何之瑜をよこしていたのです。陳独秀は思想・感情の上からトロツキー派と関係が切れてはいなかったのですが、国民党特務を欺くのに、声明が必要だったのです。共産党はこの声明を取り上げ、陳独秀はトロツキー派と関係がなくなったなどと言っているのです。確かに一部は事実で、陳独秀はトロツキー派組織とは関係はなくなっていたのです。しかし、トロツキー派の個々の同志とは緊密な関係がありました。ですから、陳独秀死去後、鄭超麟は心のこもった追悼文を書きました。ざっとこういう次第です。共産党の言っているのは彼らの観点です。

長堀　さて、五二年の反革命罪は名誉回復される可能性はありますか。

沈石　それは非常に難しい。現在の私たちから見れば、事実上は名誉回復はされていますが、法的には公式に文書が発せられてはいません。私たちは家ではなにも監視されてはいません。家族と一緒に暮らし、公民として扱われています。しかし、私たちの過去の損失は取り返しがつきません。大学の昔の同窓生たちは、みな今では社会科学院や大学の学長、教授ですが、私たちは彼らには追いつけません。生活条件はどうしようもありません。過去は過去で、埋め合わせはできません。しかし、名誉回復は非常にたやすいことですからやるべきでしょう。当局の考え一つなんです。私たちには争いようがありませんが。

　現在の多くの老幹部の見方はできあがってしまっていますから、もし、トロツキー派や陳独秀を名誉回復しようとするなら、一つ一つの事実を明らかにしていかなければなりません。しかし元トロツキー派には時間がありませんし、過去のような力もありません。老幹部はトロツキー派問題を持ち出そうとはしませんが、私たちは名誉回復させなくてはいけないのです。『毛沢東選集』はすでに、トロツキー派は漢奸、スパイだったという第一版の注に対し、第二版の注で、これは誤った論断だったと訂正しましたが、それだけことです。観点が私たちと共産党では違うのです。共産党とトロツキー

派というのは二つの党派の問題なんです。今の共産党は多党制（分派）を認めていませんからこの問題は解決できません。いかなる党派であろうと、結局、思想というものは人類の頭脳の反映であり、千篇一律にするということは不可能で、各自の意見というものがあります。レーニンが言ったように、異なる意見がないなら、党という組織は死んでしまうのです。改革開放がさらに進めば、この件もいい方向に行くのではないかと思います。今では私たちは何でも言えますが、顧慮すべき部分もありはします。実際、共産党がまたトロツキー派を以前のように捕まえることはないと思います。というのはトロツキー派はすでにいなくなりつつあり、残っているのは私たち七〇歳代、八〇歳代、最年少でも六〇数歳の者ばかりです。組織は影も形もありません。

長堀　個人的な生活の方面では問題はまったくありませんか。

沈石　それは自力更正です。いい生活の者もいれば、そうでない者もいます。大きな家に住んでいる者もいれば、いい職業に就いている者もいます。

長堀　お二人のお子さんは生活の上では問題ないのですか。

沈石　基本的に問題ありません。私たちは何も要求はありません。

梁真　今の私たちの生活における要求は極めて低くて、衣食住が満たされていればそれで十分です。お金があまれば節約して、本を買い、家で読む、ほかに趣味はありませんから。子供たちが家を出て独立すれば、私たちは心配はなくなります。十年前にこういう研究活動をしようとしたら、本当のところ、お金がありませんでしたね。北京や杭州や南京に会議で集まるには自分でお金を工面しなければなりませんから。そんな金があるはずがありません。しかし、今は退職年金がもらえますから生活は問題なくやっていけます。

沈石　私たちは物質的要求は高くありません。思想的要求は高いですが。

梁真　私たちはもう物質的要求はどうでもいいんです。思うに一生をどうやっていくかということです。そこそこ暮らして行ければそれでいいんです。

沈石　困ったことは歳をとったことです、思い通りにはいきません。それが問題です。

長堀　さて今までのお話について二、三、確認させてください。お二人の個人的なことです。郷里に帰った後、仕事を見つけて、ご結婚なさるのは何歳くらいのことですか。

沈石　私の場合は大分年がいってからで

王凡西（一九〇七－）
中共草創期からの党員。ソ連留学中トロツキー派となり、帰国後周恩来のもとで働くが、ことが露見して除名。中国トロツキー派最後の生き証人。現在は英国リーズ在住。著書に『中国トロツキスト回想録』矢吹晋訳、柘植書房、一九七九年）など。
（二〇〇一年長堀撮影）

した。五〇過ぎです。当時は結婚しようとは思いませんでした。したいともね。一人の方が生活は何かと自由ですから。

長堀　お子さんはいらっしゃいますか。

沈石　一人います。今、一八歳、高校生です。

長堀　来年大学受験ですね。大学はどこを希望していますか。

沈石　まだ決まっていません。受かるかどうかが問題です。

長堀　北京に行きたいんじゃないんですか。

沈石　当然そうでしょう。いい大学がありますから。問題は合格するかどうかです。

梁真　私は三六歳の時、結婚しました。したくはなかったんですが。というのも、当時はひどい生活で安月給でした。私の父親は私が生まれてすぐなくなり、生活は母親の手一つにかかってきました。父の生前、祖父は阿片吸引者で、商売の稼ぎはすべて阿片代に消えました。ですから家には蓄えはなく、財産もまったくありませんでした。父が死ぬと、母が店を継ぎました。私は五人兄弟で、兄一人、姉三人、一番下に私です。母は働き者の倹約家で、子どもたちを育て上げました。兄弟は誰も大学には行ってません。兄だけはそれでも高校に上がりました。兄の高校時代、日本がやってきて学校は閉鎖され、その後、兄は自学自習で、ある大学でエスペラントを勉強しました。当時その大学は抗日戦期でわが郷里に移ってきていたのです。数人の教授がエスペラントを教えていました。兄は一学期間習ってましたが、次の学期には大学はなくなってしまいました。わが家は苦しい時期で、当地には他に大学はありませんでしたから、兄に勉強を続けさせることはできませんでした。姉たちはみな高校を卒業し、一番上の姉は女子高を出て小学校の先生になりました。二、三番目の姉も高校卒業後小学校の先生になりました。解放後、三番目の姉は新華書店に移り、ずっとそこで働いてました。五七年に私が郷里に戻ったとき、仕事はなく、以前採鉱の経験があったので、兄の友人の推薦で鉱山に行くことになりました。しかし、鉱山に行くと家を離れなければなりません。

　私が郷里に戻ったのは、新華書店勤務の兄の転勤で家に男手がなくなり、母の面倒を見なければならなかったからでした。そこで兄たちは今度は私に行くなと言うのです。私はまた仕事がなくなりました。その後、民間で私立の学校をやっている友人のところで教員をしました。朝から晩まで頭がふらふらするほど働きましたが、条件は悪くなっていきました。一ヵ月の給料は一五元、この学校は共産主義の学校でした。なぜかというと、給料が校長から教務主任、クラス担任、正門の受付係まで一律一五元で、まったくの平等主義でした。学生の払う学費からしか給料に回せませんから、給料の総計と学費収入の総計を計算してみると、仕方がなかったのです。五八年までここで働き、その後は工場に入り、定年まで複数の工場で働きました。最初の工場は条件がよく、技術をやらせてくれて、化学実験室で働きました。化学工場では化学実験室は花形です。給料もそこが一番高

く、上司は君は技術要員だといいました。

その後、反右派の補充運動があって、網に引っかからなかった右派を捕まえたんです。職場ごとに右派の人数が決められていましたが、その工場には右派がいなかったので、私はノルマにあわせて右派にされたんです。トロツキー派問題のため私は反革命のレッテルを貼られました。お前はトロツキー派反対派だ、というわけです。私は労働者の前で毛沢東の言葉をひっくり返して「西風が東風を圧倒する」という反革命的言辞を弄したとでっち上げられました。それを認めろと迫るんです。これにはどうしようもありませんでした。連日の会議で、結局また反革命のレッテルを貼られました。そして二年の観察処分となり、二年後、観察処分は取り消されましたが、反革命の方はそのままでした。一度、反革命とされると、ずっとはずされることはありませんでした。給料は七九年まで昇給ストップでした。他の人の給料は何度か上がっていたのですが、私たちは元のままでした。私は一人なら暮らしていけるが、結婚して子供ができたらどうなるか、社会的にどうなるか、それに反革命のレッテルが貼られているんだから、子供にも見込みがない、と考えました。たとえ女房をもらうことができても、二人は反革命一家ということになり、さらに他の人に悪い影響を及ぼす。それで私は結婚しませんでした。

その後、昔からの友人が最初の相手を紹介してくれました。私は彼女の兄に、自分がかつてトロツキー派だったことや今でも反革命のレッテルが貼られていることを説明しました。しかし、彼は二人がよければそれでいい、と言いました。こうして最初の結婚をしたのです。最初の女房は娘が一〇歳にならないうちに、癌で亡くなりました。その後、いろいろ男親だけでは不都合が出てきました。娘の結婚に至るまで、女手がないのは困りものです。私の今の女房は、亭主に死なれたんですが、その舅と私の姉の夫の勧めで再婚したわけです。娘の面倒を見てくれる人ができ、二家族が一家になったんです。女房には娘三人と息子一人がいましたから、私は娘を四人と息子を一人持つことになったわけです。

沈石　昔の中国は一般に低賃金でした。生活費をとると、残りませんでした。ですから、十分食べられるだけでもましだったんです。あの時代はみなそうでしたよ。

梁真　私たちは結婚でき、子供もできましたが、トロツキー派の友人の中には七〇歳の今でも結婚していない者もいます。結婚していた者でも女房に自分がトロツキー派だと知られて、政治上の扱いを理由に離婚された者もいます。これは悲惨です。ですから、ここ数年来の状況を見ていて、私は喜ぶべき変化だと思っています。

沈石　そういう生活方面のことは、最重要ということではありません。主要なことは社会において、政治的に排除されているということです。私たちの人格は理解されません。一般の人たちは私たちを階級敵だと考えていますから、生活方面の扱いについても悪い影響が出てきます、特に子どもたちにとっては。当時は

他に仕事はありませんでした。もともと労働者には不向きだったんですが、実際、自分で仕事を見つけることはできなかったんです。今では状況は変わり、別の工場へ変わることもほかの仕事に就くこともできます。

梁真　毛沢東時代には私たちだけでなく、右派の人たちも辛酸をなめました。右派の人の書いた体験記に私も涙しました。私たちはまだましだったのでしょう。

長堀　過去の中国トロツキー派運動の状況についてもう少しお話し頂けないでしょうか。

梁真　さきほどの話で、補充することはありませんが、組織状況、組織形態についてちょっとお話しします。この点私もはっきりしないところがあります。中国トロツキー派は共産党と国民党の両面攻撃に対処するという考えから組織形態が決められていました。

　五〇年頃、郷里の学生の中には百人あまりトロツキー派がいました。そのほかに労働者がいました。私が五〇年に郷里を出た後、労働者組織はさらに大きくなったということでした。解放後の四九年、五〇年頃から、私たちの郷里では、学生の学校での活動が以前より盛んになりました。共産党の少年先鋒隊はもともと多くいましたが。外郭組織から見て、私たちの学校だけでもトロツキー派は百人ほどはいました。その他にも学校があるわけですから、百人から二百人はいたでしょう。当地の文革当時の警察資料にはトロツキー派の名前が一二九人載っているそうです。

梁真　解放前のトロツキー派の主要拠点は上海、温州、広西、武漢でした。重慶にも一部、少数ながらいました。北京にもありました。

沈石　この統計は不完全なものです。王凡西は四百人あまりと言っています。しかし、彼ら老世代は解放後の状況についてはよくわかっていません。当時の組織は、人数もよくわからないんです。というのは組織の末端ではその構成員同士はわかりますが、他の部分とは関わりがないからです。地下組織ですから。

梁真　四人で一つの小組［細胞］を構成しました。小組の責任者は上部と連絡がありました。上部もまた同じような形態を取っていて、直線的な縦の関係になっていました。

沈石　私たちはSY［社会主義青年団、トロツキー派の青年組織。その後、この名称はCY、MY、TYなどと変遷をたどる。C、M、Tは各々共産主義、マルクス主義、トロツキー主義の頭文字］ですが、SYの小組の下にさらに外郭組織として読書会がありました。このあたりのメンバーが知りうる範囲はさらに狭かったわけです。小組と小組の間には関係はなく、こういう組織形態は共産党のものでした。

長堀　抗日戦争後、上海のトロツキー派組織が多数派と少数派に分裂したとき、あなたたち郷里の組織はどうだったのでしょうか。

沈石　私たちは独立して活動していましたが、実際上、上部の数人の指導者は多数派でした。上海が正式に分裂していなかった頃は、両方を認めていました。多数派は彭述之ら、少数派は鄭超麟、王凡

西らです。多数派と少数派は国際的にはともにトロツキー派と認められていました。ともに永続革命論を宗旨としていました。中国トロツキー派の分岐はこの永続革命論の解釈を巡って起こりました。中国革命と永続革命論との関係をどう解釈するかをめぐってです。一方は民主革命が先で民主革命の後期に社会主義革命に発展すると主張し、他方は民主革命と社会主義革命は同時にできるし分けることはできないと主張しました。しかし、私たちの組織は当時この問題についてはよくわかりませんでした。両方にそれなりの道理があると思ったのです。それで、分裂はしませんでした。それに私たちは両方をトロツキー派と認めていました。

トロツキー派は初期にはこういう具合に解釈が違っても協力しなければならなかったのです。人が少なかったことはもちろんですが、異なる見解同士が討論して互いにわかりあうことができるからです。分裂すれば、力は分散します。私たちは上海の分裂を非常に残念に思い、つねに両派は協力すべきだと考えました。ですから、どちらか一方の側に立って他方を排斥することを躊躇しました。解放までずっとそうでしたが、解放後、彭述之ら多数派は国外に逃げ、多数派組織は消滅し機関紙の『求真』や『青年と婦女』も停刊しました。一方少数派の鄭超麟らは上海に残りました。そこで私たちは一致団結してこの局面に対処するために、少数派に合流したのです。

長堀　王凡西は少数派組織の意向でマカオに行きましたね。

沈石　そうです。ですから私たちの組織はずっと上海の少数派と連絡がありました。

長堀　現在の中共に対する見方と、中国革命についての見解をお聞きしたいのですが。

沈石　個人的な見解ですが、中共は今次の革命で勝利したんです。かつて私たちトロツキー派も何らかの役割を果たすことができました。過去において私たちはこう考えていました。中共は農民の党であって、政権を奪取することはできてもプロレタリア政権ではない以上、社会全体を変革することはできない、と。土地革命など徹底的にはできるはずがないと言う者もいましたが、中共はこれを完成させました。この点、過去の私たちの認識は不完全でした。しかし、共産党は都市では、プロレタリアートの過去の成果を継承していません。中共は無自覚にソ連の発展方向をまねたのです。スターリンがもたらしたと同様の多くの後遺症が中国にも存在しました。それで、解放後もまた文化大革命をやり、運動をやらなくてはならなかったのです。現在の視点からすると、こうしたことは中国社会自体の生産力の不足が原因でした。中国は革命前、農業社会だったからです。この問題を避けて通れません。生産力発展は社会主義建設に必須なのですから。

長堀　改革開放政策の必然性はわかるのですが、中共の取っている政策は完全な資本主義化に見えます。中共の階級的性質はどう理解すればいいのでしょうか。

梁真　この問題については鄧小平はこう言ってます。現在中国の主要な問題は生産力を発展させることだ、政策が資本主

義か社会主義かは問うてはならず、そうした問題はもはやないのだと。鄧小平は経済発展が主要な問題であるといってますが、私個人もそうだと思います。鄭超麟も生前、その点は同意していました。鄭老が言うに、中国のような遅れた国では、またさらには、解放後から今日に至るまでの一連の運動、つまり大躍進、文化大革命で経済上巨大な損失を被った中国では、社会主義を建設しようとするなら経済的な基礎が必要である、と。生産力の発展がなければ、社会主義経済建設は空中楼閣です。経済は基礎であり、経済基礎を発展させ、生産力を発展させるというのは正しい方法です。

しかし、生産力発展の後にくるのは何でしょうか。鄧小平はこう言ってます。我々は社会主義の初級段階にいる、社会主義建設の期間はまだ長くかかる、と。生産力の発展、この一点については、私たちも否定しません。資本主義の道を行くか、社会主義の道を行くかこれは政治制度の問題で、もし、生産力があるところまで発展したなら、政治制度もそれと見合うものになるでしょう。そうすればこれは社会主義の初歩的基礎ができたと言えます。しかし、私の考えるに、中国単独で発展するというのは、まさに一国社会主義で、立ちゆかなくなるのではないでしょうか。ソ連はこれを長い時間実行しましたが、疲弊しました。これは政治問題なのです。生産力を発展させながら、政治上きっぱりした態度をとらないでいると、現在のような政治的な腐敗、汚職も発生するのです。

沈石　鄧小平はそれまでの経験を総括して、現在の主要な問題は生産力を発展させることで、もし生産力が発展しないなら、社会主義の基礎はないと提起しました。この言葉は正しい。しかし、沿海地域と西北との格差はますますひどくなっています。こういう地方では国家の統治が必要です。これは非常に難しい問題です。今は現実の基礎の上に立って、現実の問題を考えるべきだと私は考えています。他に方法はないのです。今は、腹が減り、仕事がない、という飢餓の問題があります。こういう場所には汚職や腐敗が起こりやすい。これは人民の希望に反することです。鄧小平は一歩踏み出しましたが、これは必要なことでした。毛沢東やソ連の過去のやり方ではだめだったのです。

梁真　生産力の発展というのは前提です。個人的な見解ですが、経済政策と生産力の発展をどうかみ合わせていくのかが重要です。これはどうしても考えなければならない問題です。たとえば、朱鎔基は沿海部の生産力の発展から今度は西部の発展に、ということを提起していますが、これは賢明な政策です。中国の中部地区、沿海地区は生産力がかなり発展し、経済も比較的発達しています。しかし、沿海地区は中国の土地面積と人口の一部を占めるにすぎません。他の大部分はまだ貧困地区です。西部の広大な地域で物が買われるようになると、東部地区の商品生産は発展し、西部地区に販売されたり、生産資材が西部地区に運搬されたりして、当地が開発され、全面的な発展が可能となるでしょう。西部の発展を促すことは実際、東部の生産財と生活財

で西部の発展を助け、国内市場とすることなのです。こうして長い時間をかけて、全面的な発展に到るはずです。政策実行の上で、執政者が具体的に考慮すべき最大の鍵は現代化が生産力の発展と、政治制度の整備を保証していくかどうかということでしょう。私たちの見るところ、政治制度の自由は改革されてきていますが、そのスピードは速くはありません。さてこうしたことが実現した際、結局どのようにして社会主義となるのかは状況を見なければなりません。

長堀　政治的な民主がなければ経済上、生産力の発展も難しいのではないですか。

梁真　世界史上、三種の社会主義モデルが存在します。改良、民主、議会制度の社会主義、ソ連のスターリン式の社会主義、さらにユーゴの自主管理社会主義ですが、私の個人的な考えでは現在まで、マルクス主義的社会主義は存在したことはありません。スターリン式社会主義を社会主義と言うなら、それは社会主義の曲解です。確かにソ連は失敗しましたが、それは社会主義の失敗ではないのです。ではソ連は結局、社会主義社会だったのか。鄭超麟の言い方によれば、ノーメンクラツゥーラ社会でした。彼はソ連を社会主義国家とは認めておらず、国家資本主義と見ていました。国家資本主義は伝統的資本主義とは矛盾があり競争がありましたが、政治制度のために国際的な経済発展の競争に負けたのです。この国家資本主義は伝統的資本主義、すなわち帝国主義にその経済を打ち壊されたのです。社会主義が打ち壊されたのではありません。現在、民主的議会は、陳独秀が言ったようにブルジョワ階級政権の一形態です。プロレタリア階級は議会制度を利用することはできますが、これは社会主義の実践と同じということではありません。ユーゴはどうか。チトーはスターリンよりも開明的、民主的でしたが、完全な社会主義とは言えません。

長堀　それではトロツキーの言う労働者国家とは言えるのでしょうか。

梁真　ソ連でレーニン死去直後から数年間、すべての権力が高級官僚集団の手に移っていない時期についてなら労働者国家と言えるでしょう。しかし、大粛清後のソ連は三位一体の政権で、スターリンのような硬直した人物が政権を握り、国家権力を汚したのです。この時期はすでに堕落した労働者国家です。全権力が一個人に集中したのです。労働者に参政権はあったでしょうか。もしあったなら、幹部は労働者の中から選ばれ、彼らは各方面から労働者の利益を擁護したでしょう。労働者に利益はあったのでしょうか。ざっとみたかぎり、ソ連のこうした特殊階層の所得は労働者の賃金とはかけ離れており、食、住も特別な配給がありました。どこに労働者の利益があるでしょうか。私たちは経済平等主義を言っているのではありませんが、幹部は労働者と同等でなければならず、労働者の服務者にすぎません。こうした給与格差のうえに、住居、車などの特権は労働者にはありません。労働者の生活が年々低下し、参政権もない、これでは労働者国家とは言えません。では結局なんなのか。鄭超麟のいうノーメンクラツゥーラ社会とは他の

人が言うところの国家資本主義でしょう。レーニンも国家資本主義という言い方をしたことがあります。私も個人的には国家資本主義だと考えています［現在の中国を国家資本主義だと示唆する発言か］。

長堀　最後に私の専門の魯迅とトロツキーのことについて伺います。拙論［『トロツキー派に答える手紙』をめぐる諸問題」正・続［各々『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書院、一九九八年、『二三十年代中国と東西文芸』東方書店、一九九八年、に収録］でも書いたのですがあの有名な「トロツキー派に答える手紙」は魯迅が書いたものではありません。中国トロツキー派にとって魯迅はどのような存在だったのでしょう。「トロツキー派に答える手紙」が魯迅の作と見なされてきたためトロツキー派にとって魯迅は憎むべき存在とされたのでしょうか。

沈石　そうではありません。魯迅は当時の中国文壇で知識人の擁護を受けていました。魯迅の思想は先進的で、十月革命であれ、みな擁護したのです。北京大学で教えていた頃、魯迅は陳独秀の勧めで、小説を書き始めました。陳独秀は魯迅を非常に尊重していました。というのは魯迅の才能を陳独秀は高く評価していたからです。魯迅も陳独秀を擁護しました。魯迅はロシア革命に同情的で、トロツキーの文学理論は魯迅が重視したところです。二七年に大革命は失敗しましたが、二九年にはまだトロツキー派はいました。それで魯迅にも当時トロツキー派の友人がいたのです。しかし、魯迅は本来民主人士ですから、後には共産党に動員されます。中共には馮雪峰が上海で指導する左連ができました。ですが、魯迅は左連の右傾化に反対し、国防文学論争が起きると、民族解放戦争の大衆文学を提起し、国防文学はやる必要がない、国防文学は階級的立場を放棄したもので、階級協力の意味合いがあると言いました。これについては左連内部に対立があり、とりわけ魯迅と周揚が対立していました。「トロツキー派に答える手紙」について言えば、国防文学論争の頃、周揚らは一方では魯迅を籠絡しようとしながら、一方では魯迅は味方ではないと言いました。そこで陳其昌［別名陳仲山、一九〇〇―一九四二、トロツキストの一。抗日活動を理由に、上海で日帝憲兵により逮捕、虐殺された。詳しくは『中国研究月報』二〇〇二年四月号掲載の拙訳稿参照］が魯迅に手紙を書いて、彼を自分たちの側につけようとしたわけです。一九三六年以後、陳其昌は上海のトロツキー派組織にいました。しかし、魯迅はまもなく病に倒れ、陳其昌の手紙は馮雪峰の手に渡り、馮はこの機を利用して、トロツキー派を排撃したのです。陳其昌は実際のところ共産党を排斥してはおらず、ただトロツキー派の見解を表明しただけでした。その後、共産党はトロツキー派は「漢奸」だと言いましたが、売国的行為がいったいどこにあったのでしょうか。今から見ればこの「トロツキー派に答える手紙」は魯迅が書いたものではなく、馮雪峰の差し金だったのです。

長堀　まったく同感です。長時間ありがとうございました。

（二〇〇〇年仲秋）